

# 子どもが子どもを育てる 確かにそんな時代があった 兄弟姉妹がたくさんいた

昭和の二十年代後半から四十年代にかけて、一世帯三丁五人普通に子どもがいました。一家の柱の多くは出稼ぎで生計を立てるといった貧しい村でありました。

母親は忙しく、自給自足的な生活は年寄りと女、子ども、小学生も中高学年以上の年齢になると「役に立つ子ども」として、一家の働き手の一人に数えられ稼業の手伝いをしたり、子守は当然子ども役目でした。

兄や姉が、下の子どもに面倒をみるといったことは日常的なこと、兄たちが遊びに出かける時には常に一緒。おんぶしたり、よちよち歩きの弟、妹の手を引って近所の同年代たちと夢中になつて外を駆け回り自由に遊びたいのを我慢。泣いたり泣かしたりの毎日。そうして、社会の仕組みを体で感じ、大地の暖かさに触れることが



子どもらは保育施設で集団生活を知る

できました。

だからといって、すべてにおいて問題がなかったわけではなく、例えば教育面を考えたとき、義務教育ですべて終了というようない世の中でもあつたのです。

しかし、心も体も大地とともに成長できた時代だったことは紛れもなく確かなことなのです。



スティーブ・ジャングさん  
(アメリカ・サンフランシスコ出身・32歳)

村に外国語指導助手として来村してから2年と4ヶ月になります。その間に結婚、そしてパパになりました。

子どもは男の子と女の子一人ずつ欲しいと目を輝かせます。

そんなジャングさんに長男が誕生しました。あなたにとって、家族とはどのような存在なのかと問うと、「一番大切なものだと思う。」とさわやかな笑顔で答えてくれました。

## 高度化成長の中で 教育の必要性が明確に 女性の社会進出も目覚ましく

戦後五十年、日本全体が高度化成長をとげるなか本村も例外ではなく、貧しかった時代がまるで嘘だったかのような錯覚さえ起こす社会に変貌。豊かな経済は生活水準を高レベルに押し上げ、坊っちゃん、嬢ちゃん時代に突入。

低かった教育への関心も高まり昭和五十年代に入ると、進学率は九十九割と完全なるレベルアップをみせました。

それとともに、男女平等なる社会の到来。女性の社会進出は、独身貴族という言葉を生み出すまでになり、母親にとつて、子どもがいると好きな仕事ができない。ついでに、「子どもは面倒臭い」、「子どものために親が束縛される」など、「保育施設の不足」もあげられ、社会情勢は必

ずしも女性にとつて見方だったとはいえず、また、教育費に金が掛かり過ぎることも理由の一つとなつていきます。

二〇〇一年五月十七日付、岩手日報に掲載された「高齢出産は時代の象徴」のタイトル「『雅子さま懐妊』に思う」で、評論家の樋口恵子さんは、日本の少子化の原因は、「女性の社会進出ではなく、仕事と子育ての両立が難しいからだ」という事実はすでに明白である」と言い切っています。

仕事を持つ女性にとつて、育児の重みは、精神をやむ格好の餌となり、子どもの存在そのものが、苦痛以外の何者でもなくなつてしまふ。そんなそこ知れぬ現状が、そこにあるのではないのでしょうか。

特集 子どもは！ だれの者？